手塚富雄著作集 6

手塚富雄著作

中央公論社

手塚富雄著作集　第六巻
定価四八〇〇円
昭和五十六年三月　十　日印刷
昭和五十六年三月　二十　日発行
著　者　手塚富雄
発行者　高梨　茂
印刷者　青木　勇
発行所　中央公論社
〒104　東京都中央区京橋二―八―七
振替東京二―三四
©一九八一　検印廃止

手塚富雄著作集　第六巻　ドイツ文学あれこれ　目次

ゲーテ随想

ゲーテと現代　三
ゲーテの詩　三
ミニョンのうた　二三
ゲーテの恋愛遍歴　二六
ゲーテとヘーゲル　三七
現代の知恵――ゲーテ二百年祭に寄せて　三九
長篇の愉しみ――「ウィルヘルム・マイスター」　四三
ファウストの「暗黒な」　四四
略述・ゲーテの生涯　四八

いきいきと生きよ――ゲーテに学ぶ

一　不断の実行　五五
二　生きているあいだは　五五
三　辛抱づよく　六三
四　迷いと酔いをもて　六九
五　与えることと受けること　七四

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

六　生を信ぜよ　八六
七　永遠なる女性的なるもの　九五
八　認めること　一〇六
九　探究と畏敬　一〇八
十　知と知恵　一一五
十一　学問をつづけること　一二〇
十二　今日という日　一二五
十三　率直な表明　一三〇
十四　享受のための断念　一三四
十五　批評について　一三七
十六　目ざすべきこと　一四三

紹介二、三

自分に正直だったニーチェ――年少の読者のために　一五二
ヘルマン・ヘッセの文学　一五四
邦訳「ヘルダーリン全集」の完成　一五六

現代の詩人たち

一六一

二人の詩人――ベンとカロッサ　一六一
カロッサを評したリルケ　一七七
パリの無国籍詩人　一八一
朗読会の詩人　一八八

ドイツ文学案内

序　説　一九二
世界文学ということ　ゲーテの考えた世界文学　ゲルマンとドイツということば　ドイツという意識の誕生　ヨーロッパの根幹　ドイツの宿命　ゲルマン的とは　古高ドイツ語　ドイツ文学の主性格

一　中世期　一九九
ドイツ文学の二つの頂点　僧侶から騎士へ　宮廷文学と民族叙事詩『ニーベルンゲンの歌』　宮廷文学の代表者　〔補説的に〕ドイツ語の変遷の三つの時代　『ヒルデブラントの歌』　宗教文学　ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ　ワルター・フォン・デル・フォーゲルワイデ

二　近代文学への胎動　二〇八
市民階級の擡頭　「職匠歌」とハンス・ザックス　民衆本　人文

主義者の最高峰エラスムス　ルターとドイツ文学

三　十七世紀　二二

バロック様式ということ　バロック様式の歴史的地位　バロック様式の精神的性格　十七世紀のドイツ文学の地盤　『阿呆物語』

四　啓蒙主義とレッシング　二八

啓蒙主義の大勢　ドイツの特殊事情　ゴットシェト　真理探求者レッシング　喜劇『ミンナ・フォン・バルンヘルム』『エミーリア・ガロティ』『賢者ナータン』

五　シュトゥルム・ウント・ドラングの地盤　三三

シュトゥルム・ウント・ドラングの意義　ルソーとドイツ　ドイツにおける宮廷対市民　抗議としてのシュトゥルム・ウント・ドラング　国民的文学への踏み出しとその先駆者たち　クロップシュトック　ハーマン　ヘルダー

六　ゲーテ　三三

民族と人類の教育者　ゲーテの生い立ち　自然との触れあいとヘルダーのみちびき　フリデリーケとの恋愛　ゲーテの生涯の悔い『ゲッツ・フォン・ベルリッヒンゲン』『若いウェルテルの悩み』ドイツ古典主義の基本性格　ドイツ古典主義における近代精神シュタイン夫人　ゲーテ中期の二傑作『タウリス島のイフィゲ

ーニエ』『タッソー』 ゲーテのイタリア旅行　根源的なものの追求　文学における根源的形式　ゲーテとシラーの友情　バラーデの傑作　バラーデの一例『魔法使いの弟子』　教養小説の源流『ウィルヘルム・マイスター』　演劇から人生へ　『ヘルマンとドロテア』　建設的な市民精神　完成期へ　『詩と真実』『親和力』『ウィルヘルム・マイスターの遍歴時代』　人間の自己信頼　『西東詩集』『ファウスト』　二つの原理の対立　「永遠の女性的なるもの」　ヘレナの問題　知慧の最後の帰結

七　シラー　二七二

世界文学におけるシラーの地位　「暴主らに抗して」『群盗』　シラーにおける自由とその道義的責任感　『フィエスコの叛乱』『たくらみと恋』『ドン・カルロス』『喜びを歌う』　シラーとカント　より高い自由へ　『素朴文学と情感文学について』　古典期のシラー　『ワレンシュタイン』　晩年の諸作品

八　古典主義とロマン主義のあいだ　二八四

流派を越えた三詩人

ヘルダーリン　二八五

生涯の問題と探求　ディオティーマとの出会い　理想の実現『ヒュペーリオン』　ヘルダーリンの願い　『エムペドクレス』　詩人とキリスト　ドイツ人への鞭と愛

ハインリヒ・フォン・クライスト　二九二

近代文学の先駆者の最も苦悩的な生涯　知への訣別と情熱の燃焼　処女作その他　喜劇『アンフィトリオン』　喜劇『こわれ甕』　女性のタイプの両極端　ナポレオン憎悪　『ホンブルク公子』　散文作品
ジャン・パウル　二九九
散文芸術の大先達　ジャン・パウルの現実性　『ヴーツの生涯』など　『巨人』
九　ロマン主義　三〇四
ドイツにおける現実と文化の関係　ロマン主義の性格　古典主義との関係　ロマン主義の中世讃美など　ロマン主義の近代性　ロマン主義の自我観
ロマン派の詩人たち　三〇九
シュレーゲル兄弟　ワッケンローダー　ティーク　ノヴァーリス
魔術的観念論　『青い花』その他　サロンと女性　後期ロマン派
ブレンターノ　グリム兄弟　シャミッソー　フーケ　アイヒェンドルフ　E・T・A・ホフマン
十　写実主義の時代　三一九
技術時代の到来　文化の普及と集団化　時代感情とスタイル　ドイツの政治的状勢　ビーダーマイヤー　ヘーゲル　ショーペンハウエル
過渡期の人々　三二四

ウーラント　メーリケ
写実主義の初期　三三六
ハイネとロマン主義　ハイネの作品「若いドイツ」　レーナウ　シールスフィールド　社会小説　歴史小説　リュッケルト　プラーテン　ドロステ　戯曲部門　ビューヒナー　グリルパルツェル　ゴットヘルフ
写実主義の盛時　三四〇
時代背景　詩的写実主義　ケラー　フォイエルバハの影響『緑のハインリヒ』　短篇その他　シュティフター　諸短篇『晩夏』など　ラーベ『雀小路年代記』など　シュトルム　シュトルムの抒情詩　C・F・マイヤー　マイヤーの諸作品　抒情詩人マイヤー　社会小説　フライタークー　郷土文学　フォンターネ『迷路』と『エフィ・ブリースト』「ミュンヘン派」　ヘッベル『ユーディト』その他『ヘロデスとマリアムネ』『アグネス・ベルナウエル』とヘッベルの悲劇思想『ギューゲスとその指輪』　オットー・ルードウィヒ　ワーグナー
十一　自然主義から現代まで　三五六
一般的な時代背景　三五六
第一次世界戦争まで　現在の世界のなかのドイツ　現代と文学
現代の歴史的境位
自然主義　三六〇

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

「力と富」への風潮　自然主義の性格　二つの中心地　「徹底自然主義」　ハウプトマン　『はたおりたち』その他　自然主義に対する反撥　ハウプトマンの転向　自然主義の功績

生命の文学　三六五
ニーチェの影響　生命力の肯定　デーメル　ヴェーデキント　ハインリヒ・マン　ボヘミアンたち

印象主義　三六八
印象主義の性格　その厭世観と芸術性　リーリエンクローンとホルツ　ホーフマンスタール　印象主義とデカダンス　シュニッツラー　シュテファン・ツワイク　ムージル

理想主義的文学　三七三
精神的空白のなかに　シュピッテラー　「ことば」への熱意　ゲオルゲ　リルケ

郷土芸術と民族感情　三七六
その思想家たち　郷土的なもの　民族的なもの　政治の手に

表現主義、新即物主義など　三七八
敗戦のころ　トラークルたち　表現主義の思想　表現主義の諸傾向　新即物主義　新即物主義の性格　ブレヒトなど　「保守的革命」　ブロッホ　カフカ

巨匠たち　三八三
ヘッセその他　カロッサ　トーマス・マンの生涯の問題　マンの批判性　『魔の山』など　時代との対決　マンとゲーテ

戦後文学　三八七
東ドイツの文学　西ドイツの文学
掌篇ドイツ文学史　三九三
あとがき　四〇二

ドイツ文学あれこれ

ゲーテ随想

ゲーテと現代

斎藤勇先生と御縁の深い本大学（東京女子大学）で、先生からの依頼でお話する機会を持ったことを光栄に存じます。ただ、プライベートなことで忙しく、充分な準備ができないまま参りましたので思いついたことを断片的にお話することになりそうですが、お許しを願います。

ゲーテという名は日本でも広く知られていると思います。ゲーテ、また、ゲーテが自分の先生のように思っていたシェークスピア、こういう大詩人は、単に文学に関心を持つ人だけが心に留めるのではなく、生活人、つまり実際の生活のなかで実務に携わっているような人も、かれらの書物に身を入れ、自分の導きにしているように思います。ひとつだけ例を挙げますと、亡くなったお医者さんですが、その人はゲーテ宗という名の宗派をたて、お堂を造り、人を呼び、集会を持ったそうです。そういうことをゲーテが地下で、あるいは天国でどんな気持で受け取ったかはわかりませんが、ゲーテという人は、少なくとも関心は文学愛好者だけにとどまらないという、そういう受け取り方をされているのが、ひとつの特徴ではないかと思います。

「ゲーテと現代」という題を掲げたわけですが、ゲーテという人をどういう風に摑むかということが最初の問題になろうかと思います。ゲーテは神様ではありませんから長所も短所もありますが、とにかく普通以上に大きい人ですので、いろいろな摑み方があると思います。その摑み方を決めてかかるのが、彼の理解への入口になりましょう。たとえば、フランスの有名な詩人ヴァレリーは、ゲーテは綜合的普遍的である、すなわち非常に広い人であるという点に特にアクセントを置いて誉めています。あるいは、ゲーテの特徴を摑むのに、この人は眼の人であるという言い方もよくされます。なるほどそういわれてゲーテの肖像を見ますと、眼は大きく開き、鏡のような感じで、さぞ視力もよかったろうと思われます。たとえば、色彩に関心を持っており、雪の原に陽がさす光景について、陽がさしている雪は黄色味を帯びて見えるが、陰の方は青い色である、また、夕方になるとその色がどう変るかというようなことをいっしょうけんめい観察した人でありますから、確かに物を見ることに特徴のあった人であると言えます。こういう風に特徴を摑むというのもひとつの仕事で、大事なことです。摑んだ結果がこちらへどういう風に響いてくるかは、受け取る側の問題です。例えば眼の人ととらえて、眼の人もよいものだと思えば、こちらも眼を大きく開いて見るということを学ぶようになるわけです。何かをつかむということはこちらへ響くものを見つけることである、そういう関係にあると思います。またイギリスの作家エリオットは、ゲーテは知者であると言っています。しかも、乾燥無味、理屈ばかりの哲学的知者であるというよりは、詩人であって知者であるということを特に強調して誉めています。確かに詩人的知者という面はあると思います。ちょっとしたことを彼が言いましても、こちらに、感動や共感を呼び起します。ごく短いことばをひいてみましても、そういうことがわかるような気がします。ゲーテのことばを集めた本を開いてみましょう。

「不愉快を感ずることも、われわれは自分の役に立てねばならない。それも生の一部分、いや、大部分なのであるから。」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com